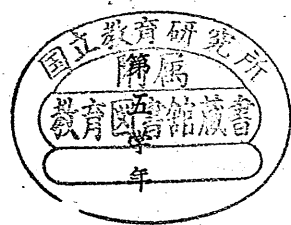


國語

第五学年 下

K160.8
1
12

國語



下





もくろく

一、 小さな行.....四

二 写 生.....十三

三 わたしの民ちゃん.....二十三

四 光を求めて.....三十一



五 人形しばい.....四十三

六 傳 説.....五十五

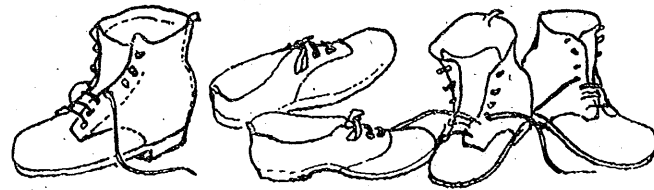
七 みえない力.....六十四

八 雪まろげ.....七十

九 テニス.....七十七

十 こどぼのはたらき.....八十七

十一 ある写真帳.....九十六



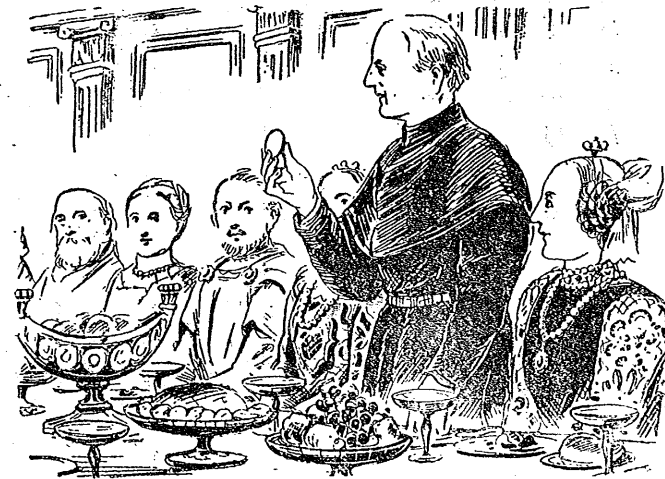
一 小さな行

コロンプスのたまご

コロンプスがアメリカを発見して帰ったとき、イスパニア人はたいへん喜びました

ある日、祝賀会の席で、人々がかわるがわる立ってコロンプスの成功を祝しますと、ひとりの男が、

「大洋を西へ西へと航海して陸



地にてあつたのが、それほどの手がらだらうか」といってあざわらいました

これをきいたコロンプスは、つと立って、テーブルの上のゆでたまごをとり、

「みなさん、こころみにこのたまごをテーブルの上に立ててごらん下さい」といいました

人々は、なんのためにこんなことをいいだしたのかと思いがちやってみましたが、もとより立とうはずがありません。このときコロンプスは、コツンとたまごのはしをテーブルにうちつけて、なんの苦もなく立てていました

「みなさん、これも人のしたあとでは、なんのどうさもないこ

とでございました。

やまぶきの一枝

ある日、太田道灌は、たかがりにてかけました。すると、にわか雨が降りだしたので、近くの家をたずねて雨具をかりることにしました。

「もしもし。」

こういって戸をたたきますとおくからひとりの少女がでてきましたので



「雨で困っております。雨具をかりたいのですが。」
とたのみました。少女はなにを思ったのか、ふと庭さきにさいていた黄色なやまぶきの一枝をおつてきて、それをしずかにさしました。

道灌は、その花の枝を手にはしましたが、なんのことだかその意味がわかりません。少女どやまぶきの花とをみくらべるばかりでした。

それからのちになって、道灌は少女の心がわかりました。それは、

「七重八重花はさけどもやまぶきのみのひとつだになきぞ悲しき。」

という古歌に、少女の思いをたくしたものでありました。

はた織り

孟子がまだ子どものころでした。

家をはなれて勉強にでかけていましたが、ある日のこと、母親がなつかしくなり、会いたくなったので、学校から家へもどってきました。

「おかあさん。」

といって、母のそばへかけよりました。そのとき、母ははたを織っていました。孟子の顔をみると、つと立って、そばにあった小がたなをとりあげました。

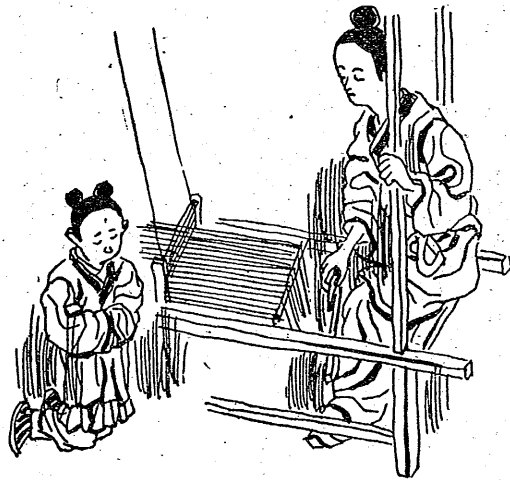
孟子がびっくりしていると、母は、いままでたんねんに織り続けていたぬのを、小がたなでたち切っていました。

孟子はおどろいて、

「おかあさん、どうなさったのですか。」

とたずねますと、母は、

「おまえが学問のちゅうとで家に帰ってくるのは、ちゅうと、織物をちゅうとでたち切るのと同じことです。」
といました。



ガラスのかけら

ある町角の廣場で、ひとりのみすばらしい身なりをした老人

が、道路をうろうろとみまわしながら、なにかさがしては、それをひろってポケットにいれていました。

そのようすをみていたじゅんさが、老人のそばによつてきて、

「なにをひろっているのですか。」とたずねました。

すると、老人は、ほおえみながらポケットに手をいれましたが、とりだしてみせたものは、ガラスのかけらばかりでした。

じゅんさは、

「こんなものをひろって、どうするのですか。」



か。

とききました。すると、老人は廣場の方を指さして、

「あの廣場で遊んでいる子どもたちをごらんさい。くつをはいている子どもはひとりもいません。もしけがでもしてはかわいそうですからね。」

と答えました。

この老人は、ベスタロッチという人でした。

書物

リビングストンが南アフリカを探けんしていたときの話です。ある日、リビングストンが木かげで書物を読んでいました。それをみた土人のひとりが、書物というものはなにかすばらし

い力をもっているものだと考えました。
 そこで、リビングストーンがちよつとそとにでかけたるすにやつ
 てきて、その書物を手に取りました。
 そうして、ページをはきとって、たべてしまったということ
 です。



二 写生

(一)

文雄は、庭のかたすみに三きやくをすえ、がかを立てて写生
 をはじめた。

そこには一本のざくろの木
 があつて、夏じゆう美しい花
 をつけていたが、あらかたちつ
 て、あとにいくつかの実がなつ
 ていた。それが、めきめきと
 大きくなり、このごろは、き



わだつて美しいつやつやしたしゅの色がさしてきた。文雄は、
それがかきたかった。

高いところからたれさがったのもいい。まだ青々とした木の
葉の中から大きくのぞいているのもいい。だが、根もとのこ
ろに三つ四つかたまつてしだれているところもいい。

文雄は、あれこれと考えていたが、根もとをかこうと決心し
た。そうして、いよいよ下がきをかきはじめた。しかし、その
根もとの地面には、夏のころ、草とりをしてつみ重ねておいた
かれ草が、すっかりくちていた。文雄はそれが氣になってしか
たがなかった。

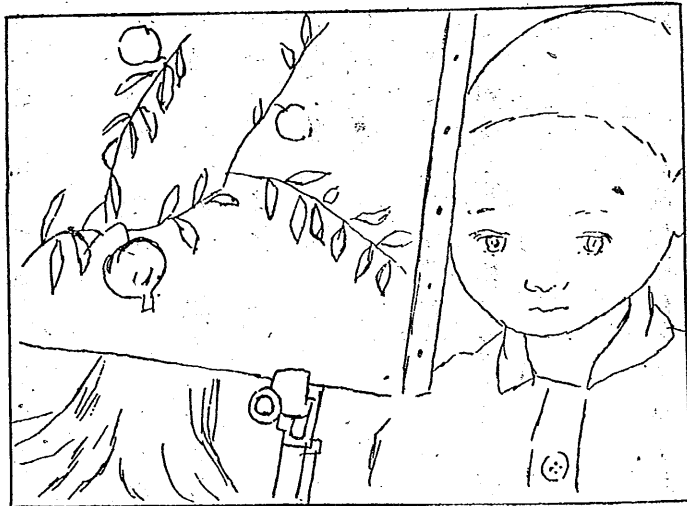
「これをとりかたづけてやろうか。」

ひとりごとをいいながら文雄が、そのくちた草をとりのけよ

うとすると、大きなえんまこ
おろぎが一びき頭をだしてい
た。そうして、文雄が手をの
ばすと、すばやくあなの中へ
かくれてしまった。

「これは、こおろぎの巢なん
だな。そのままにしておい
てやろう。」

文雄は、それをとりのける
のをやめて、また下がきにか
かった。だいたいの形をしっ
かりとつかんで、日のあたる



ところ、かげになったところ、力のこもった角、まるみのある面、重みのかかった枝のつけね、ふわふわした軽い葉、そんなところをはっきりつかまえたものだと思って、しきりに木炭を動かしていた。

下がきがすむと、パレットの上にチューブから絵のぐをだして、色をぬりはじめた。これは、絵のすきだったおじさんからゆずってもらったもので、子どもにはりっぱすぎるほどだった。いい色の絵のぐがたくさんあった。しかし、パレットの上でみたときは、ずいぶん美しくみえるが、カンパスの上にぬりつけてみると、思いもよらない色になってしまう。

かきなおし、ぬりなおして、かいていくうちに、ひととおりできあがった。文雄は立ちあがってすこしはなれたところか

らじつとみつめた。

「だめだ。すこしも立体感がない。あの、ざくろの色もかけてないや。」

文雄は、三きやくにこしかけて、またふでをとってかきはじめた。

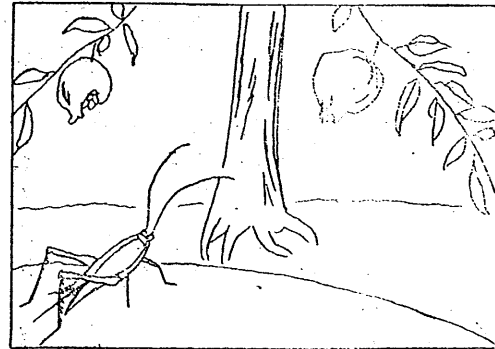
(二)

「もしもし。ざくろさん。ざくろさん。たいへんいい色になりましたね。」

「ああ、こおろぎさんですか。まだだめです。もっともっと美しくなりたいと思っていますが——あなたの声もたいそうよくおなりではありませんか。はじめ短い羽を動かしてじ

ツビツと鳴いていたときには、ほんとうにおかしいようでしたけれど――」

「ぼくにはだれも教えてくれるものはありません。せんだって、ふと羽を動かしてみたら、ビツビツという音がしました。ははあ、これが鳴るんだなと思つてやつているうちに、だんだんおもしろくなったのです。おとなりの草むらでも、遠くの草むらでも、ビツビツという音がする。みんな自分たちのなかまだなと思つてよくきいてみると、じょうずなのもあるし、へたなのもある。毎晩鳴いているうちに、



すこしずつじょうずになっていくようです。」

「近ごろはたいへんじょうずになりました。このあいだの晩もピアノの先生が、散歩にいらつして、あなたの鳴く声に耳をかたむけて、たいへん感心していましたよ。」

「いや、わたしはあんまりへたなので、耳ざわりでいやがつておいでだろうと思ひました。――あなただつてその実をそんなに美しくなさるには、ご苦心がおりだつたでしょうね。」

「そこへいくと、こおろぎさんよりよほどいいのです。わたしはなん年もなん年も生きていますからね。一年一年とすんだことをかえりみて、來年はもっともつとよくしたいと考えることができます。」

ですから、はじめて実をつけた二三年は、青い小さな実が、

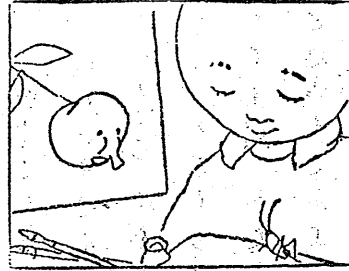
ほんの二つ三つ、ついたりつかなくなったりだったのに、このごろでは、いつも美しい実をならせることができるようになりました。

「やっぱり容易じゃないんですね。」

「この実のかけは黄色くぼけています。わたしはこんなところがすこしもないようにしたいのです。けれども、思うようにいきません。」

「ほら、そこで絵をかくている。文雄さんがいつてましたよ。どうしてこのざくろはこんなに美しいんだらうって。」

「そうですか。わたしはまた、あのような絵のぐがあればいいなと思いましたよ。あれがあれば、どんなかげのところで、美しい色にできますがねえ。」



「絵をかくことも、いっしょうけんめいにけいこしなくちゃだめでしょうね。」

「そうです。文雄さんがりっぱな絵かきになるころは、わたしも、ずっと大きな木になって、美しいりっぱな実をたくさんつけるようになりたいものです。」

「ざくろさんが、来年とか、さ来年とか、それからもっとさきのことをおっしゃっ

たりすると、なんとなくさびしくなります。」

「ごめんなさい、こおろぎさん。でも、あなたの歌には、そのさびしい氣持がでているので、人の心を動かすのだって、あのピアノの先生がおっしゃいましたよ。」

(三)

「自分には父もある、母もある。まだわかい。先生もあるし、友だちもある。どんな絵の大家だって、一心にけいこをして、じょうずになったのだろう。」

そうだ、けいこだ。高い理想をめざして、いっしょうけんめいけいこをすることだ。」

文雄はこう考えた。



三 わたしの民ちゃん

長いこと外地にいた姉たちがひきあげてきました。せまい家なので、兄は氣のどくだといって、いつもえんりよがちにしています。母をはじめ、うちの人たちは大喜びです。ひさしぶりで、姉やふたりのまごたちといっしょに、同じ屋根の下でくらせるのですから、家内じゅうが歓声をあげているといってもいいすぎではありません。

やしきがすこし廣いし、父がまえからそういふときのことを考えて、近所の荒れ地を三十アールばかりかいこんして、さつまいもや野菜を作ったりしていたので、さしあたり困ることは

ありません。

ふたりのまごというのは、父母にとってのことですが、わたしには、かわいいめいとおいにあたります。

おいの正男^{しょうお}ちゃんは、五つですから、もうひとり遊びができますが、めいの民ちゃんは、二つ、満てい^{まんてい}え^えば一年三ヶ月で、まだ歩けません。発育^{はつよく}がたいへんおくら^{おくら}れていて、かわいそうです。わたしは民ちゃんをひと目みたとき、天にものぼるほどうれしかったのです。

民ちゃんをなんとかして早く歩くようにしてやりたいものです。民ちゃんは、まだ、うんこもしっこもいえません。早く、いえるようにしてやりたいものです。民ちゃんは、ぼつぼつものをいにかけていますが、ちよつときいてもわかりません。姉

だけにわかるへんなことばをいつています。わたしも早くそれを覚えたいと思います。

学校から帰つてくると、わたしは民ちゃんの子もりをひき受けます。姉が、いそがしいので、おしめカバー^{おしめカバー}をさせたままほっておくと、民ちゃんは平気でそこらをはいまわっています。わたしは時間をはかつては、そとさえ寒くなければ、ものかげへつれていって、用をたさせるようにしました。

はじめはいやがつていた民ちゃんも、よごれていないほうが氣持がいいので、ときどき、わからないことばで、わたしに知らせるようになりました。

「ねえさん、たいへんな進歩ですよ。いまにもう失敗もなくなるようにしてみせます」

「ありがとう。いそがしいものだから、ついしつけができなくて。」

民ちゃんは、つくえとか、テーブルとか、なにかとりつく物があるとすぐに立ちあがって、そのまわりをぐるぐると歩きます。ちゃぶ台をだして、食事の用意などをしていると、



とりついてぐんぐんおしえて、かべぎわにおしつけてしまったります。けれども、かんじんの歩くことはまだできません。

せん。たった九十センチぐらいのところでも、こっちからあっちへいくとなると、すぐに手をついて、いざり歩きになります。かた足をなげだして、おしりていざって歩くのです。

たいへんおそいようですが、いざりだすとなかなか早いものです。いまそこにいたかと思うと、もう次のへやにはいっているというように、すこしもゆだんができません。

立ちはじめには、物を持たせると立つことができると、だれかがいったことを思い出しました。それで、わたしはおべんとうの包みをこしらえて、

「民ちゃん、これ持って学校へいきましょうね。」
といって、民ちゃんに持たせてみました。

「ガッコ、ガッコ。」

民ちゃんはうれしそう
 にいつて、その包みをと
 りあげると、よちよちと
 立ちあがりました。
 「ばんざい、ばんざい。
 さあ、いっちょにいき
 まちようね」
 たもとをひいてやると、
 民ちゃんは、ぼったりそ
 こへすわりこんでしまっ
 ました。
 「だめねえ。さあ立つた
 して。」



立ちあがると、民ちゃんは、はじめて二足ほど歩きました。
 こんなふうにして、毎朝おべんどうをこしらえて持たせてい
 るうちに、民ちゃんは三足四足と歩けるようになりました。
 ある日、学校から帰ってくると、姉が大さわぎしていました。
 「ゆだんができないわ。いま、民ちゃんがひとりでおかって口
 から地面におりて、わたしのげたをひっかけて、正男のあと
 を追っかけて道まででていたのよ。」
 「まあ、そう。でも、いっそんなことを覚えてたんでしょ。た
 いへんな進歩じゃないの。」
 わたしはそういいながら、このごろふとつてきて愛らしくなっ
 た民ちゃんをだいてやろうとすると、かぶりをふって、

「オソト、ワン、ワン、チロイ。」

というのでした。

おとなりで、このご

ろ、白いぬをかうよう

になりましたが、民ちや

んは、そのことをいう

のでしよう。

「チロイ、ワンワン、

チツポ——

ワンワン、ゲタ、ナイ、アンヨ、イタイ、イタイ。」

民ちゃんのことば数のふえるのには、おどろいてしまいました。



四 光を求めて

(一)

私の一生を通じて、わすれることのできないいちばん大きな日は、サリバン先生がきてくださった日であります。それは一八八七年の三月三日、私が満七さいになる三ヶ月まえのことでありました。

この日の午後、私はなんとなくものを待つ氣持で、じっとげんかんにたたずんでいました。午後の日光はげんかんをおおったすいかずらのしげみをもれて、みあげる私の顔に降りそそいでいました。もう、めばえそめたそのなつかしい葉や、花の上

を、私の指はまったくわれをわすれてなでていました。私は、
どのようなおどろきとふしぎが私を待っているのか、すこし
も知りませんでした。

私は、近づいてくる足音
を感じましたので、それが
母だとばかり思いこんで、
両手をさしだしました。だ
れかがそれをとらえました。
そうして、次のしゅん間に
は、私は、先生——私の心
の目をあらゆるものに向けて開いてくださるため、いいえ、そ
れよりもなによりも、私を愛するためにきてくださった——そ

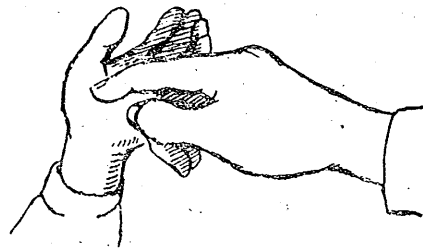


のかたの両うでの中に強くだきあげられました。

サリバン先生は、お着きになったあくる朝、私をおへやに呼
んで、一つの人形をくださいました。私がしばらくその人形と
遊んでいますと、先生は、私の手に、
「人形」という文字をつづられました。

私は、すぐこの指の遊びがおもしろく
なって、それをまねようと思いました。
どうとうじょうずにつづれましたとき、
私は子どもらしい喜びと得意さに大は
しゃぎで、二階から母のところへかけ
おり、指さきて人形という字をつづってみせました。

そのとき、私は、もちろん、ことばをつかっていることや、



そんなものがこの世にあることさえ知らず、ただ、さるの入まねのように指を動かすだけでした。

それからいく日かのあいだに、なんのこともわからないままに、私は、「ピン」「コップ」「ぼうし」など、たくさんのことばをつづることを覚え、「すわる」「立つ」「歩く」など、すこしばかりの動詞も知りました。けれども、物にはそれぞれ名まえのあることを知ったのは、先生がおいてになってからいく週間もたつてからのことでした。

ある日、私が新しい人形を持って遊んでいますと、サリバン先生が、ほかの大きな人形を私のひざの上において、「人形」という字をつづりながら、二つとも同じ名であることを私にわからせようとなさいました。

その日はすでに、私は、「ゆのみ」と「水」とでたいへん苦しんだあとでした。サリバン先生は、「ゆのみ」が道具で、「水」がその中にはいつているものであることを、はつきり教えるために苦しめたのですが、私は、いつまでたっても区別ができませんでした。先生は失望して、一時やめていらっしゃいましたが、こんどは、二つの人形が同じ名まえであることをわからせようとなさいました。私は、とうとうかんしゃくをおこして、新しい人形を手にとつて、ゆかにたたきつけました。そうして私は、くだけた人形のかけらを足さきを感じながら、ゆかいに思いました。私は、先生がかけらをいろりのかたすみにはきよせておいでになっていようずを感じましたが、ただ、腹だちの原因がどりのぞかれたという満足を覚えたばかりでした。

しばらくして、先生がぼうしを持ってきてくださったので、私は暖かい日なたにでかけるのだと知って、おどりがりました。ふたりは、いどの小屋をおおっているすいかずらのあまいにおいにひかれて、庭の小道をおりていききました。だれかが水をくみあげていましたので、先生は私の手をどの口の下へやりました。冷たい水がいきおいよく流れているあいだに、別の



手に、はじめのはゆっくりと、次には早く、「水」という字を書いてくださいました。私は、身動きもせず、立ったままで、全身の注意を先生の指の動きにそそいでいました。

ところがとつぜん、私は、なにかしらわすれていたものを思い出すような、めばえてこようとする心のはたらきといったようなあるふしぎなものを感じました。このときはじめて、「水」はいま自分のかた手の上を流れているふしぎな冷たいものの名であることを知りました。

この生きた一ことが、私のたましいを目ざめさせ、光と希望と喜びとを興えることになったのです。

こうして私は、物にはみな名まえのあることがわかったのです。私の手にふれるあらゆるものが、生命をもって動いている

ように感じはじめました。

それは、先生が興えてくださった新しい目で、すべてをみるようになったからです。

へやに帰るとすぐ、私は、自分がこわした人形のことを思いだして、いろりのかたすみに走りよってかけらをひろいあげ、それをつぎあわせようどしましたがだめでした。

私の目にはなみだがいつぱいたまりました。自分のしたこと、がわかつたので、生まれてはじめて、くやむ心と悲しみに胸をさされました。

私はその日、たくさんのことばを覚えました。全部覚えてはいませんが、その中には、「父」「母」「妹」「先生」などのことばがあったことを思い出します。

できごとの多かったこの日もくれて、小さなベッドに横たわりながら、この日が自分にもたらした喜びを思い返していたとき、私のほど幸福な子どもを発見することは、むずかしいでしょう。私は、生まれてはじめて、きたるべき新しい日を待つことを知りました。

(二)

これは、ヘレン・ケラーというアメリカの女の子が書いたわが生がいの一せつを、日本語になおしたものです。

よんでわかるように、ケラーは、めくらで、そのうえつんぼでした。それなのに、こんなりっぱな文章が書けるということ、は、なんとすばらしいことではありませんか。

ケラーは、生まれて一年半ほどたったとき、大病にかかって、みるはたちき、きくはたらきを失いました。みることもできず、きくこともできず、話すこともできないので、氣持があらあらしくなり、かんしゃくもちになったのもわりはありません。

ケラーの両親は、なんとかして、すこしでももののわかる子どもに育ててやりたいと念じて、もうあ教育に経験のあるサリバン先生にきていただくことにしました。

サリバン先生が、このあらあらしいわけのわからないケラーをしつけていくのには、なみなみならぬどりよくがいました。しかし、ケラーに「ことば」というものをわからせることによって、そのまっ暗なさびしい心を明かるくすることに成功しました。

だんだんちえがつき、ものの心がついて、学校にいくようにな

りました。もちろん、サリバン先生に手をひかれ、ふたりがひとりのようになつて、勉強をはじめたのです。手のひらに文字を書くことから、進んで、手と手をにぎりあい、そのにぎりかたによつて「ことば」をとりがわすようになりました。

ケラーは、もうサリバン先生なしには、生きていけません。先生も、

「私が命がけてせわをすれば、ケラーさんがすくわれるのです。」



どうぞ神さま、おまもりください。
といのりながら、一生をケラーのためにささげました。
そののち、ヘレン・ケラーは、大学をりっぱな成績で卒業し、
はかせにまでなりました。これは、ケラーのサリバン先生に對
する信頼と、サリバン先生のケラーを思ふ愛情とが、一つになつ
たおかげです。



五 人形しばい

動きの世界

「ふしぎだなあ。
なにが。」

「ねえ、おじさん。とこのまの人形が、動きだしそうな氣がするんだけど——」

「そうだね。おどりだしそうにみえるね。」

「いつかおじさんからいただいた童話の本に、人形が夜中に集まっておどりだす話がありましたよ。」

「この人形だって、みんながねしずつあったあとで、動いている」

のかもしれないよ。

「ほんとう、おじさん。」

「さあ、人形にきいてごらん。はははは——でも、動く人形だつてあるよ。一雄くんは、人形しばいをみたことがあるかね。」

「人形しばいって、人形がしばいをするんですか。」

「そうだ。もちろん人が動かすんだがね。日本には、文楽といつて、りっぱな人形しばいがある。その人形などは、長さにすれば一メートル以上のももあるが、まるでたましいがはいつているように動くよ。」

「へえ、そんな大きなものを、どうして動かすんでしょう。」

「人形つかいといわれる人がいて、ものによつては、三人がかりで一つの人形を動かすんだ。からだ全体と右手を受け持つ

人、左手だけの人、足だけの人と、それぞれ手わけしているんだが、まゆ毛も、目も、口も動くし、ときには、したをだしたり鼻がてんぐのようにとびだすこともある。人形はものをいわないが、そのかわり説明がついている。ほら、分家のおじいさんの大すきなじょうりさ。あれにあわせてしばいをするんだ。」

「おもしろいでしょね。」

「そりゃ、おもしろいさ。人間のしばいとちがつて、みていると別世界にいったような楽しい気がするよ。」

「文楽のはかにまだあるんですか。」

「あるとも。いまいった文楽は手でつかうのだが、そのほか、指でつかうもの、ぼうでつかうもの、糸であやつるものなど、

いろいろ種類がある。あやつりは文楽よりもっと古くからあったし、おじさんの子どものころ、よくみたものだよ。あのころは影絵もあつたよ。



「影絵ってやつぱり人形のしはいですか。」
「日本ではあまりさかんでなかったが、アジアでもヨーロッパでも、りっぱな影絵しはいができています。ジャワのはとくに有名だね。牛皮を切りぬいて、美しい色がつけてある。これに光をあてて影絵にしてみせるのだが、人間ばかりでなく、動物などもでてくる。それが音楽や歌にあわせてしはいをするわけだ。」

人形しはいって、いろんな國にいろんなものがあるんですね。『だいたいい人間には、顔の色やくらしかたがどんなにちがつていても、心にあることを、なにか美しいものであらわそうとする氣持がある。だから、人間がいるところには、かならず詩もあれば、絵もある。音楽もある。命のない人形を思うままに動かして、喜びや、悲しみや、傳説や、歴史やを美しく舞台にあらわそうとする望みもあるのだ。』

でも、生きた人間のほうがうまくやれるし、それに便利でしう。」

「便利とか不便だけで物事を考えないところに、人間の美しさやおもしろさが生まれてくるのだ。たとえば、わざわざ絵のぐをつかって時間をかけて絵をかくより、写真のほうがずっ

と便利なわけだけれど、絵には絵のいいところがあるからね。ところで人形しかなかったが、これは人間にできないことでも平気でやれる。空をとんだり、すがたを消したり。それに、人間みたいに不平やわがまをいわないからね。

「そりゃ、そうですね。」
「そのうえ、手がるておもしろいし、自分で作って自分で動かすのは楽しいものだよ。こうえんでも教室でも、どこでもやれるからね。きみもひとつ、作ってみるといいよ。」

「できるかも。簡単な人形の作りかたを教えてあげよう。お友だちとやってごらん。」

一 雄の手帳から

一 指人形の作りかた

1 材料

古はがき一まい、古新聞二まい、日本紙、のり、
絵のぐ、いたぎれ、古ぎれ。

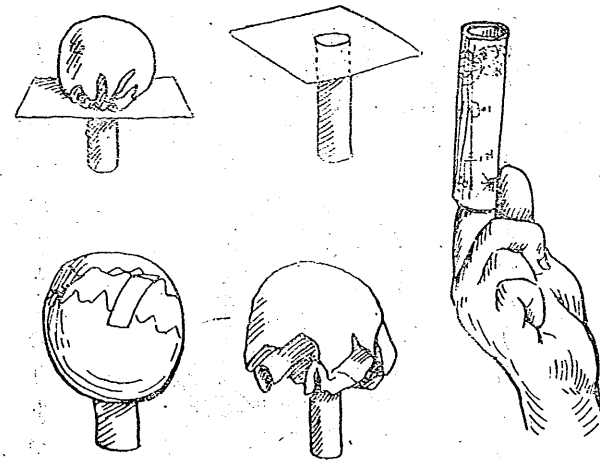
2 顔の作りかた

(1) 古はがきを横にまいて、ひとさし指のふとさのつつを作り、のりでとめる。

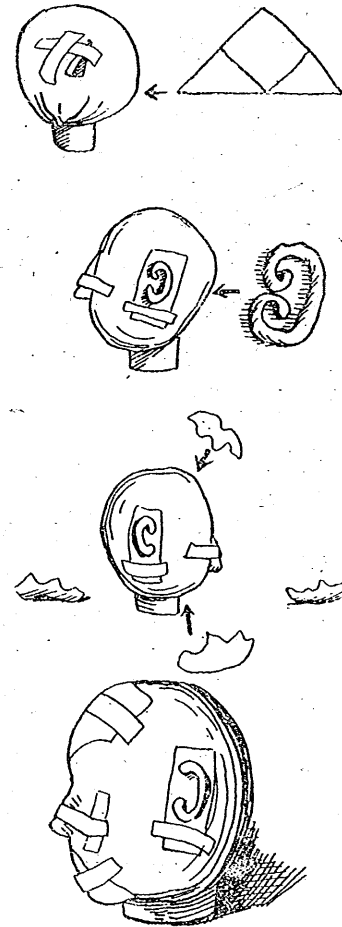
(2) 古新聞を二まいとも八つに切って、そのうち一まいだけを正方形にする。ほかのはよくもんでのばしておく。

- (3) 正方形の一まいにのりをつけてつつにかぶせる。
- (4) 首のところだけのこして、もんだ紙にのりをつけないで、上から上からかぶせる。
- (5) 首のほうからもかぶせてまるくしてから、細長く切った古新聞にのりをつけてとめる。
- (6) 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞で作って

のりでとめる。



- (7) 日本紙を細長く切って、一まい一まいによくのりをつけてはりかためる。

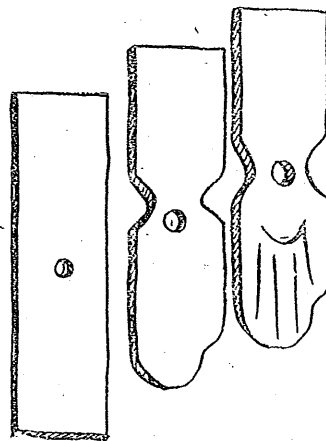


- (8) よくかわかしてから、絵のぐで顔をかいたり頭の毛をぬる。

3 手の作りかた

(1) いたぎれを、はば二センチ、長さ九センチくらいに切つて、まん中にあなをあける。

(2) あなの両わきを切りこんで、手さきをまるめ、指の線をぼる。



4 着物の作りかたと手のつけかた

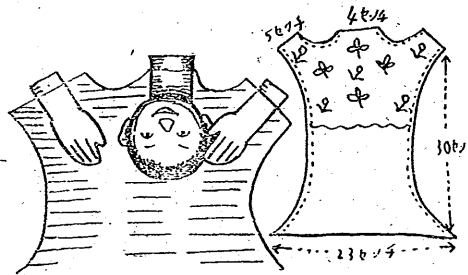
(1) 古ぎれを、はば二十二センチ、長さ三十センチくらいにつきあわせて、図の形に切る。これを二まい作る。

(2) 二まいあわせて、図の点線のところをぬう。

(3) 顔は、着物のすそからさかさにいれて、首を着物にぬいつける。

(4) 手は、手さきのほうをいれて、穴に糸を通してぬいつける。

(5) 顔と手をつけた着物を裏返すとできあがる。



二 人形のつかいかた

1 ひどさし指を首の中に入れ、おや指となか指を、そでの中、いたのうしろがわにいれる。

2 人形だけを舞台へだして、つかう人の顔や頭がみえない

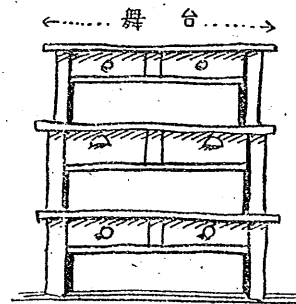
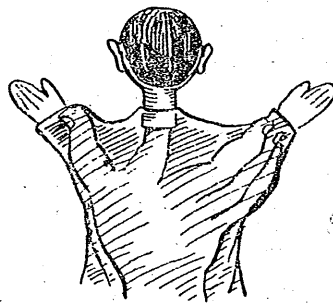
ようにする。

3 人形がかたむかないように、話すときは人形の顔を前後に動かす。

三 舞台の作りかた

1 つくえやいすを重ねて、つかう人のかくれるところを作り、まくでかくす。

2 舞台の上には、紙やいたぎれて、木や家を作っておく。



六 傳説

先祖代々住みなれた土地はもとよりのこと、自分の生まれたところは、なんともいえない暖かい感じのするものである。なつかしい山や、おもむきのある川などがあるためばかりではない。子どものときからききなれた傳説が、そのあいだにおりこまれていくからである。傳説には、正しい歴史にもとづいたものもあるが、昔からいい傳えられたというだけのもののほうが多い。また、文章に書きつづられて有名になったものもあるが、ただ人々のあいだで語り傳えられているだけで、そういう人たちのなくなるにつれて、順々に消えていってしまうものもある。

それで、おじいさんやおばあさんからきいた話を思いだして、書きのこしておくということは、ただおもしろみがあるばかりでなく、どういことである。

傳説を廣く全國で調べてみると、よく似たようなのが、あちらこちらで発見される。その中には、世界に共通なものさえある。次にいくつかの例をあげてみよう。

みそ五郎

昔、島原にみそ五郎という大きな男がいた。みそ五郎は、雲仙岳にこしかけて、ひなたぼっこをしながら、まへの海で顔をあらうのを樂しみにしていた。

雲仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ五郎が畑をうったとき

のくわのあとで、そのとき落ちた土くれが、有明海の中にある湯島であるという。

九十九の石だん

秋田縣の男鹿半島に、神山、本山という二つの山がある。どちらもけつしてたやすくは登れないが、ふしぎなことに、神山のほうには、昔から九十九だんの石だんができている。すばらしい大きな石だんで、とても人間わぎではない。

昔、神山のおくにおにが住んでいて、毎年村にあらわれては、田や畑を荒らすので、村の人たちは困りはて、おにに向かって、一つの難題をもちだした。それは、おにが一夜のうちに百だんの石だんをきずきあげること、もしそれができなかつたら、

これからのちは、けっして村へでてきてはならない、もしそれができたなら、毎年ひとりずつ、おにに人間をくわせてやるというのであった。

おには、これを承知して、ある夜、石だんをきずきだした。なにしろ、いっしょうけんめいであるから、みるみるうちに工事がはかどって、九十九の石だんができあがった。ところが、いま一だんというところで、いちばんどりが鳴いて、東の空が明るくなった。おにはおどろいてすがたを消してしまった。おには約そくをまもって、そののちはもう田畑を荒らすよう



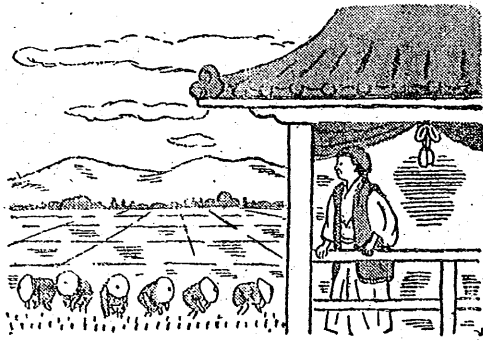
なことはなくなった。

湖山の池

鳥取の西方約四キロのところに、まわり十二キロの湖がある。これが湖山の池である。

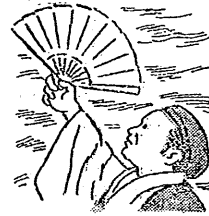
昔、この里に長者がいた。一代二代はいい人で、よくさかえたが、三代めの長者は、先祖のことを鼻にかけて、わがままをしはじめた。

ある年の夏、きょうは長者の家の田植えたというので、里のおとめたちは、赤いたすきもかいがいしく、朝から集まっ



てきた。

長者は、なんと思っただか、なん千アールの田をきょう一日で植えてしまえといいつけた。里の入たちはおどろいたが、いいだしたことはあとへひかないので、おとめの数をまして、田植え歌勇ましく、一心にはたらいた。長者は、高どのの上からこのありさまをながめて、得意になっていた。



ところで、もうあとわずかといふところで、日ははや西の山に傾いて、くれそうになってきた。このとき、高どのに立っていた長者は、日のまるのおおきをあげて、しずみかけた日をさしまねくと、さすがの太陽も、まねかれるままに空の中ほどもどってきた。それで、のこりの田植えも無事にすんで、長者の望み

はとげられた。

ところが、そのあくる朝ながめると、高どののは消えてしまつてあとかたもなく、きのう植えたなん千アールのあの美しい田さえなく、みわたすかぎりさざなみがうちよせる大きな池となつていた。

家具の岩屋

徳島縣の津峯山に、家具の岩屋というのがある。昔、あるまじしい人が、ふとしたことから、この岩屋からぜんやわんなどの家具のであることを知った。それからというものは、いり用のときはいつもここへきて、岩屋の入口で頼んだ。そうしてよく日いってみると、頼んだ品物がちゃんとそろつてならんでいた。

そのことが評判になって、だれもかれもかりにいくようになった。その中にわるい人がいて、かりた家具をかりっぱなしにして返さなかった。

そののちは、だれがなんと頼んでも、かしてくれなくなったという。

十和田湖

十和田湖の近くの奥瀬村に、ひとりの木こりがいた。名を八郎といった。ある日のこと、八郎が山でしごとをしていると、のどがかわいてきた。

水を飲もうと思って小川の岸にでてみると、美しい小魚がおいでいる。八郎はその魚をとってやいてたべた。

小魚はしおからかったのて、のどがかわいてたまらない。そこでまた川の水を飲んだ。いくら飲んでものどがわきがとまらなかった。

そのうちからだがだんだん長くのびて、おしまいにはびになってしまった。家にはひとりの母がある。母にそのからだをみせるにはしのびない。また入にみられるのもこまる。

八郎は思い切って、水ぞこにとびこむと、小川がひろがって、みるみるうちに湖となった。それが十和田湖のおこりだということである。



七 みえない力

根

葉は青く、

くきは長く、

みきは高くそびえているが、

根はちつともみえない。

花は美しく、

実はうまい。

しかし根はちつともみえない。

根のさきは毛より細い。

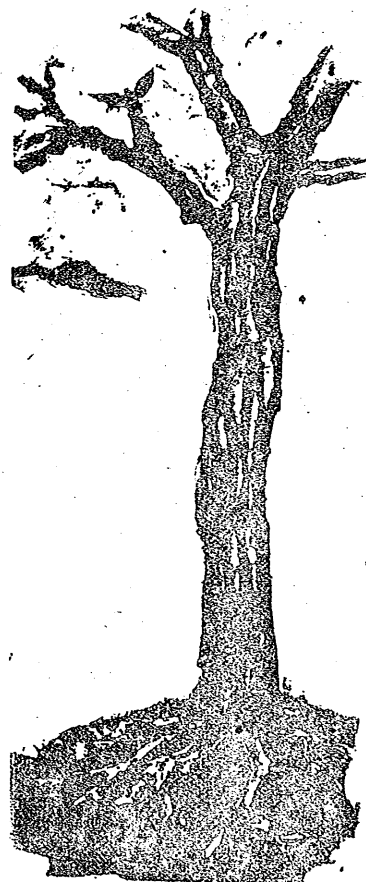
毛よりもやわらかだ。

その細いやわらかなものが、

地をうがち岩をおしわけ、

深く廣くのびていく。

のびていく根のさきをさえぎるものはなにもない。



おつなのようなたくましい根が、
深くのびてみきをささえ
廣くのびて枝をやしない、
それからた細かい根が、
つなのようにからみあって、
葉を育て花をさかせる。

根はみえない。

みえないが深くて長い。

深くて長い根の上に、

みごとな草や木がしげっていく。

のこぎり

のこぎりには、はがある。

のこぎりのはは、

いぬの歯のようにとがって、

一つおきに右と左にすこしよじれて

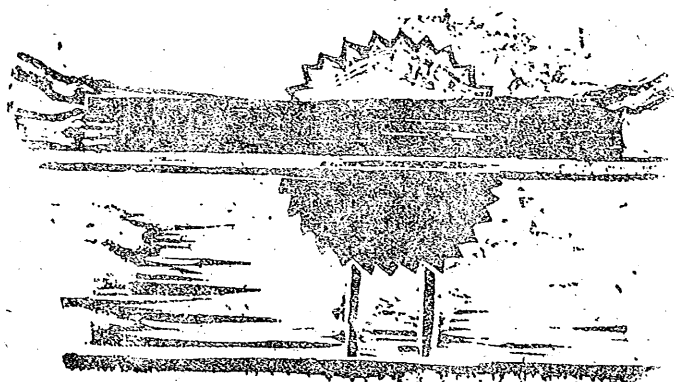
二十も三十も続いている。

五十も六十も続いている。

のこぎりのはは、

いつもやすりをかけて

右と左によじっておかないと、



なんの役にもたたない

のこぎりは

あつみをもっている

大きなかたい物を切るのこぎりはは、大きくてあつみ
小さなやわらかい物を切るのこぎりはは、小さくてうすい

糸のこは糸のように細く、

ひきまわしはひじょうにせまい。

まっすぐに長く切るのこぎりは、廣いはばをもっている。

こびきの大のこははばが廣いし、

製材所のまるいのこぎりも、大きなさしわたしをもっている。

はたらきのある人は、

はをもったのこぎりににている。

しかし、いつも勉強してみがきをかけていないと、

じき、役にたたなくなる。

どんなにはたらきがあつても、

それにあつみと

廣さがなかったら、

正しくりっぱに世の中をわたることができない。

ハ 雪まろげ

深川の芭蕉の家近くに、曾良という人が住んでいました。曾良は、信州の入で、歌がたいそうじょうずでしたが、芭蕉のことをきいてから、その弟子になりました。そうして、はい句を勉強することに心をきめました。

曾良は思いました。芭蕉はたったひとりで住んでいて、なにかにつけて不自由であらうから、いろいろお手傳いをしてあげたい。下男のように住みこんであげてもいいけれども、芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、家もせまいので、自分は、その近所に別に家をかりて住むことにしました。

そうして、毎朝早くきては、芭蕉のおきないうちに、いどから水をくみあげたり、ごはんをたいたりしました。また、まきが少ないと、近所へ木をひろいにいたりしました。このようにして芭蕉につかえながら、はい句の話をきくのでした。先生の近くにいればこそ、毎日教えてもらえるので、これがなによりうれしいと、曾良は喜びました。

そのうちに、冬がきて、くもった空がひくくたれる日が続き、ました。芭蕉はからだがよわいので、寒さは身にこたえました。が、雪をみるのが楽しみでした。芭蕉は、くもった空をあおぎながら、雪が早く降るといいなあと待ち遠しがっていました。そのあたりに遊んでいる子どもたちも、同じ氣持でした。まだ、なにも降ってきもしないのに、

雪やこんこん あられやこん
こん

などと、はやしたてていました。
芭蕉は、子どもが大すきでし
た。そのあたりにいるのは、川
べりにある船大工の子どもや
のりをとりにてるりようしの子
どもたちで、どれも身なりはき
れいではないのですが、芭蕉は
いつも遊び友だちにしていまし
た。

みんなは、雪が降ったら、な



にをして遊ぶの。

「雪だるまを作るの。」

「じゃあ、おじさんも手傳つてあげよう。」
話をしているうちに、パラパラと音がして、白い小さなつぶ
つぶのものが落ちてきて、子どもたちや、芭蕉の足もとに落ち
て、はね返ったりごろがったりします。

「やあ、あられた、あられた。」

子どもたちは、小さな手をしゃくしにして、受けようとしま
すが、あられはその手にはのらないで、顔にあたったりふとこ
ろにとびこんだりします。芭蕉は、にっこりわらって立ってい
ましたが、子どもたちのかけていく方に、自分もいっしょにか
けたしたいと思いました。

いざ子ども走りあるかんた
まあられ

芭蕉の待ちに待った雲が、
どうとうくれがたから降って
きました。みるみるうちにつ
もりましたが、曾良が水をた
くさんくんでおいてくれたし、
まきもたくさんとつてきてく
れてあるし、そのうえ、台所
の米入れの大きな入れ物もか
なり重いので、二三日は困る
こともありません。



ふだんは筑波おろしがさわがしく、雨戸をゆさぶったり、大
川の波の音がバサリバサリと、まくらにひびくのでしたが、そ
の夜は、すべての音も雪にうずめられたようになしずかしてした。
そのしんとしたしずかさの中に、芭蕉は心をすませ、雪の句
を考えました。

トントントン トントントンと入口をたたく者があります。

「先生、もうおやすみですか。」

その声は、毎日ききなれてゐる曾良の声です。芭蕉はすぐ戸
をあけました。

「こんなに降るのによくきたな。」

「先生は、おひとりですらしていられるかと思うと、どうして
もこずにはいられませんでした。」

「友だちがほしくなるのはやはりこんな晩だ。まあ、火をたきつけておくれ」

やがていろいろには、パチパチとしばがもえあがります。

「先生、今夜の雪の匂はいかがですか」

「句か、まだできない。だが、みせるものがあるよ」

芭蕉は、えんがわにいつてなにか持ちだしてきました。それは、赤いおぼんの上に、雪をまるめてこしらえたうさぎでした。なんてんの実が、赤く、うさぎの目らしくいれてありました。

曾良は、芭蕉の子どもらしい手すさびがすっかりうれしくなりました。ふたりは子どものようにわらいました。

きみ火をたけよきものみせん雪まろげ

九 テニス

少年

メキシコのテニス選手キンゼーと私とが、いよいよ試合をする日のことでした。テニスコートには日本とメキシコの国旗が美しくひるがえって、きょうの戦いを物語っています。スタンドには、はじまるまえからたいへんな見物人でした。時間がせまったので、私はユニホームをつけて、練習のためにコートにでました。すこしばかり手ならしをしてから、休けい場にもどつてくると、中國人らしい十一二の兄弟にサインを頼まれました。

その少年たちは、じょうずにえい語をつかって頼みました。
私は、その少年の持っていたペンをかりて、サインをしてやりました。

少年たちは、これを見て、うれしそうに、えい語で、

きょうは、きつと勝ってください。

といいました。

私は、いままで試合のまえにこんなふうにはげまされたことはありませんでした。あまりかわいい少年だったので、よくみていますと、どこかしら日本人らしいところもあるので、

「きみたちは日本人ですか。」

と、だずねました。ふたりの少年は、にっこりとわらって、
そうです。

とはっきり答えました。

「そうだったのかい。きみたち

は、日本語を知っているの。」

「いいえ。」

「どこで生まれたの。」

「セントルイスで。」

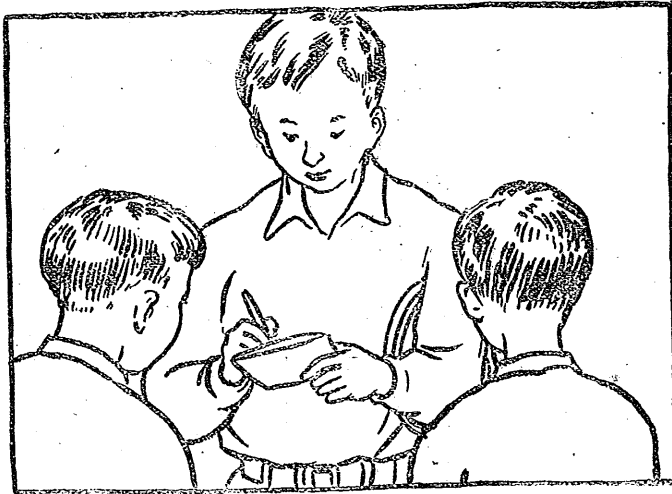
「日本へいきたくない。」

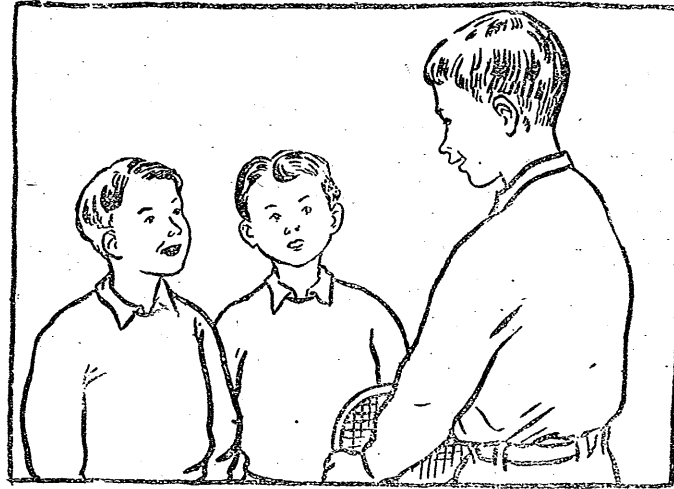
「いきたくありません。」

「どうして。」

「友だちがないから。」

「じゃあ、きょうのテニスの試合には、どちらをおうえんす





るの。キンゼー選手はセント
ルイス生まれだよ。
こう、私がたたみかけるよう
にたずねたとき、少年たちは
オフ コース、フォア ジャ
パン。サ」。
「いうまでもなく、日本ですよ、
と、ことに「ジャパン」ということ
ばに力をいれて答えました。そ
のひとみの中には、「なぜ、そん
なことをきくのか。という色が
あらわれていました。

日本という國をみたこともなく、また日本語をすこしも話せ
ないこの二少年が、遠い母國の選手のために、勝つことをいの
つてくれていることを知って、胸がいっぱいになりました。
それからまもなく試合がはじまりました。キンゼー選手は世
界的名手ですが、私もどうしても勝たなければならな
いと思ひました。

火のでるようなはげしい試合が続きました。三時間もぶつど
おしに戦いました。なんどもコートでたおれました。たおれて
はおき、おきては戦いました。私はスタンドから一心におうえ
んしている二少年のことを思つては、ふるいたって戦い、どう
とう五セットで勝つことができました。私はいまでも、あのと
きのことをわすれることができません。

やわらかなボール

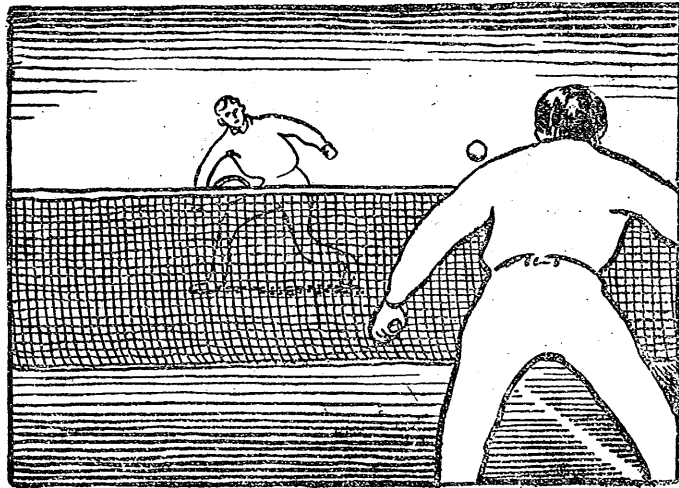
五月、六月、七月、八月の四ヶ月にわたって、十一ヶ國のテニス選手をなぎたおした清水選手は、最後の決勝戦にのぞむことになりました。もし、この決勝戦に勝つことができたなら、世界のほまれ、デビスカップを、日本では、はじめてもらうことになります。

清水選手の相手はチルデン選手でした。チルデン選手はアメリカかきつての名手です。身長は一・八七メートル、みるからにりっぱな体格は、小さな清水選手のおよぶところではありません。それでも、この清水選手の試合を見物しようと、方々の國の人々が、そのコートを目がけて集まりました。

まっ白い線のひかれたコートには、日ざしがさんさんと降りそそいでいました。そこへ両選手があらわれました。スタンドの人たちは、われるようなはく手をふたりに送りました。

「プレー」。

試合がはじまりました。目にもとまらぬボールが、ネットの上を右に左にと、ゆききしました。ボールはたましいのこもった生きもののように、なつて、は



ねとびました。一つのボールを中心にして、両選手はとぶ鳥のようにかいまわりました。

かたずをのんで試合をみているうちに、早くも、第一回は七―五で清水選手が勝ち、第二回めもやはり清水選手の勝となりました。

あの小さいからだ、まほうつかいのようになって、大きなチルデン選手を追いつめるものすごさは、ことばではあらわすことができません。

しかし、さすがにチルデン選手です。このままおされるものではありません。もう然とたちなかって、電光のようなボールをうちだしました。第三回めはチルデン選手の勝、続いて第四回めもチルデン選手の勝となりました。

見物人は、いよいよ手にあせをにぎりました。ところが、試合のまっさいちゅう、どうしたはずみか、チルデン選手はかた足をふみすべらせてしまいました。そうして、いまにもころびそうになりました。

相手を一きよにうちめすぜつこのチャンスです。チルデン選手もそのおうえん者たちも、もうあきらめているときでした。清水選手は、ボールをやわらか



くして、しかも受けやすいところに、送ってやったのであります。チルデン選手は、とりみだしたしせいではありましたが、やわらかなボールだったので、無事に受け返すことができた。試合はふたたびはげしいものになっていきました。

つきつぎと、両選手はしのぎをけずって戦いました。夕日はすっかりおちてしまいました。

わずかな点のちがいで、清水選手の負けとなりました。

ネットをはさんで、両選手はかたいあく手をかわしました。

心おきなく戦いぬいた両選手のために、見物人たちは、しばらく、あらしのようなはく手をおしませんでした。

十 ことばのはたらき

(一)

父が、

「水を持っておいで。」

という

庭で植えた木の手入れをしている父にこういわれたら、バケツか、じょうろに水をいっぱいいれて持っていくだろう

手紙を書こうとして、すずりばこをあけた父にこういわれたら、水さしに水をいれて持っていくだろう

ふる場の中で湯をかきまわしている父にこういわれたら、手

おけに水をいっぱい飲んで持っていくだろう。

ことばは、そのときのまわりのようすや、ゆきがかりや、音声や身ぶりによつて、いろいろにその意味がかわる。

水を持っておいで。という

簡単なことばでも、相手の人のいうことばのわけをよくききわけて、それによくかなうようにしてはならない。

もし、そのわけにかなわない

ことをすれば、たいへんおかしいことになるばかりでなく、そのことばがわかったとはいえないことになる。

話をきくときには、相手の人のいつていることばをよくきき



わけ、のみこまなければならぬ。そうでないと、相手の人に満足を与えることができないし、また自分の誠意も通じない。

自分が話をするときには、その場のようすによくあうように、氣をつけて話さなければならぬ。

ごく簡単な「ありがとう」というあいさつにしても、ほんとうに感謝の心持をこめていうときと、ただとおり一べんのあいさつとしていうときでは、いいかたもかわってくるであろう。食事のたびごとに「いただきます」「ごちそうさま」にしても、そのときそのときの心持があらわれるはずである。そうでなかったら、ただ口さきでいうだけのことになる。ただ習慣としてことばをつかえば、ことばの力がうしなわれていく。それは自分の生活を軽はくにし、相手の人をいやしめることにもなるから

である。

どんなたつといことばでも、ただ口まねをして、おうむのようになえていたのでは、そのことばは、すこしの力も発きしないからねんぶつである。

話すことばは、その場その場にあらわれるその人の面影ということもできよう。

(二)

「くりひろい」にいった。

太郎が、こういう短い文を書いた。

太郎はこの「くりひろい」の中に、さまざまな氣持をこめているにちがいない。天氣のよかったこと、山へいったこと、弟やい

ぬをつれていったこと、くりがたくさん落ちていたこと、カサカサと落ち葉をふんでいったこと、小鳥が鳴いていたこと、帰っておかあさんにゆでていたこと、たこと、みんなでたべたこと——楽しかったさまざまなことが、こまかに、この文の中にたたままれてゐるにちがいない。

秋子も同じように、「くりひろい」にいった」と書いた。太郎と同じ文であるが、その中にた



みこまれていることは、太郎とはちがつている。となりの友だちにさそわれていったこと、くりはあんがい少なかったこと、そのかわりきのことがたくさんあったこと、りすをみつめて追いかけたこと、もみじの枝をとってきたこと——そんなことがふくまれている。

ほかの人がこれと同じ文を書いたとしても、そのなかみは、おそらく太郎や秋子と同じではなからう。それは、めいめいの生活や経験が同じでないためである。

みんなが「遠足」という同じ文題で書いても、書かれたことがそれぞれちがつてくるのも、やはりこのためである。

しかし、たたみこまれているなかみはそれぞれちがつても、「くりひろいにいった」といい、「遠足」ということばは、だれにで

も同じようにわかり、同じように通じる力をもっている。そこにことばとしての性質があり、おもしろさがある。

書くことは、話すこととちがつて、その場のようすが相手にみえないから、ことばづかいやいいあらわしかたには、いつもう氣をつけなくてはならない。前後の続きぐあいをよく考えて、ことばを選び、ひとりがつてんでなく、読み手によくわかるようにくふうすることがたいせつである。

文を書くときには、よく手をいれることもできるし、なんども書きなおすことができる。文をなおすことはつまり心を練ることになる。心を練るほど、ことばがろがれてくる。

「赤とんぼがとんでいる」

「赤とんぼ」という文字をとおして、すいすいとびまわるかわい
い赤とんぼを、心の中にえがきます。「とんでいる」で動いて
いるようすがすぐわかる。

「赤とんぼ」が「とんでいる」——このようにまどまると、だれ
でも読んで、すぐにそのわけがわかる。それは文字のおかげで
ある。ところがこれを読んだ人々の心には、めいめいちがった
ものがある。だされてくる。太郎は、秋の青い空を赤とんぼがあ
れてとんでいる景色を思い、すすきの野原を心にえがき、自分
もそんなところについて遊んでみたいと思う。

正男は、きよ年のいまごろのことをふと思ひだす。弟にせが
まれて、赤とんぼをとりにでかけたが、道ばたに野はぎがさい

ていたので、赤とんぼはとらずに、花を手につぱいつんで帰っ
たことを思う。

秋子は、おと年、この学校にうつつ
てきたときのことを思ひだす。だれも
話し相手がないので、しょんぼりと校
庭に立っているとき、赤とんぼが自分の
まわりをとんでいた。

赤とんぼがとんでいる。こんな短い
文であるが、読み手によって、三人三
よう、それぞれちがったことを心の中に思ひうかべる。いった
ん読まれてしまうと、読み手の思ひでや心持にとかかれて、そ
の人の生活や経験によって生かされてくる。



十一 ある写真帳

はじめのことば

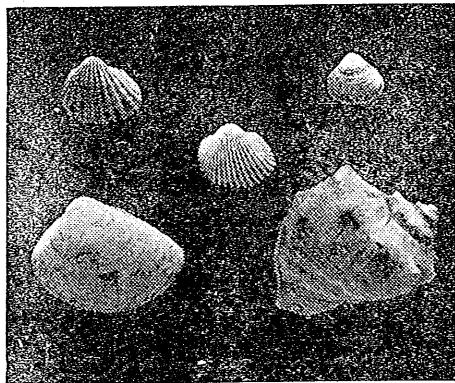
あなたがたの家に、写真帳があるでしょう。

それにはあなたがたのおとうさんや、おじいさんや、ひいおじいさんの写真がでていたり、あなたがたの小さいときの写真などもあるでしょう。

その写真帳をひろげてみると、あなたがたの家の昔からいままでのことがさまざまに思いだされるでしょう。なつかしいことや、楽しいことや、ときには悲しいことなどもあるでしょう。

次の写真帳は、なんの写真帳でしょうか。
これを見て、どんなことを感じるでしょう。

貝 づ か

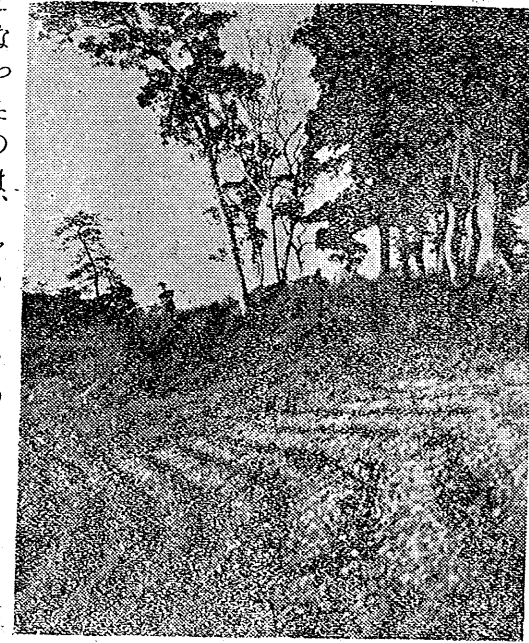


ここに貝がらがあります。みたところ、なんのかわりもない貝ですが、いまから三四千年もまえの貝です。四年生のとき習った貝づかのことを思い出してください。

貝づかからでる貝は、三百種類にものぼりますが、古代の人は、はいがい、はまぐり、かき、しじみ、あ

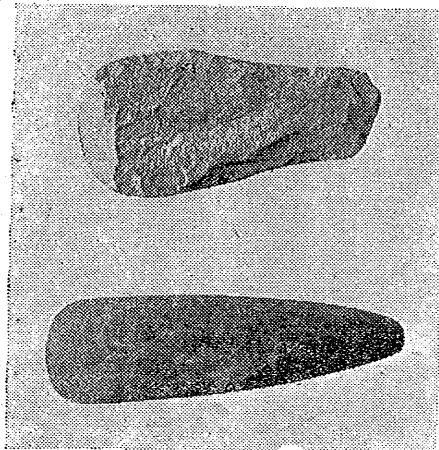
かにしなどをたく
さんたべていたよ
うです。このほか
魚では、たい、さ
ば、まぐろ、かつ
おなどをたべまし
た。

このように、古
い時代のがはっ
きりわかるいとぐちとなったのは、
う学者が、東京の大森の貝づかを発見してからのことでありま
す。

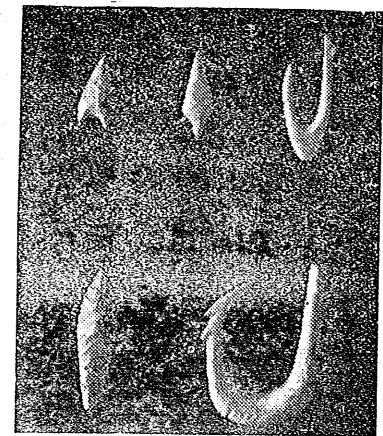


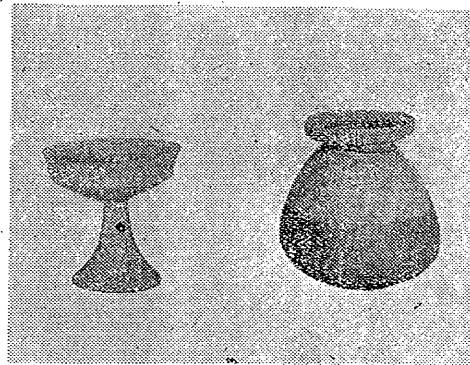
石器と土器

貝づかからてたものをならべてみ
ましょう。石の矢の根があります。



石のお
のもあ
ります。
しかの
角などで作
ったつり針
もあります。
また、土器
もあります。
これは、
食物をいれ
るための物
ですが、
もちろん、
水をくんだり
運んだり

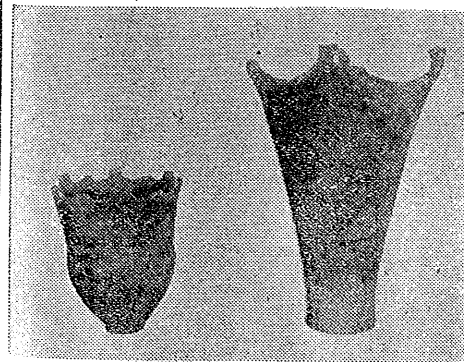




するときにもつかったことでしょう。
土器には、なわ目のものがあるの
で、じょうもん式土器といえます。形
も、かめや、はちや、いろいろのもの
があります。

じょうもん
式土器のほか
に、やよい式

土器というのがあります。それは、も
ようもごくかんたんで、形もたいへん
よくまとまっています。この式の土器
は、はじめ、東京のやよい町から発見



されたので、やよい式土器とい
う名まえがつけられています。

はにわ

この人形は、はにわといって、
古代人のはかからほりだされた



ものです。赤色のすやきの土人
形で、高さは一メートルほどあ
り、男や女のいろいろなすがた
をあらわしています。手首やむ
ねなどには、まがたま、まるた
まなどがかざってあります。こ

のやさしいのびのびした顔をごらん下さい。これをみても、平和を愛した古代の人たちの氣持がよくわかるではありませんか。はにわには、このほか、うまや、いぬや、鳥などをこしらえたものがあります。

夢殿の観音

この美しい、りっぱなほどけさまは、いまから千三百年ばかりまえに作られたものであります。

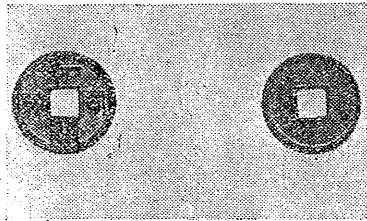


夢殿の観音とって、いまでも、多くの人々からたつとばれ

ている作品です。

はじめてのお金

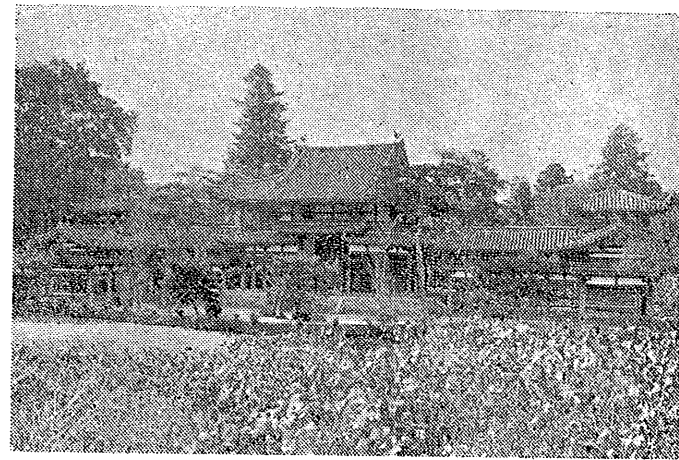
これは、千二百年ほどまえに、はじめて作られた日本のお金です。いまつかっているお金とずいぶんちがいます。四角なあながあいていたり、クロスワーズパズルのようにならんだ文字があつたりして、おもしろいお金です。お金がなかったときにくらべて、お金ができてからはどれほど便利になったか、考えることができますか。



ほうおう堂

これは、九百年ほどまえに作られた平等院（ひらうぐういん）という建物の中にある名高いほうおう堂です。

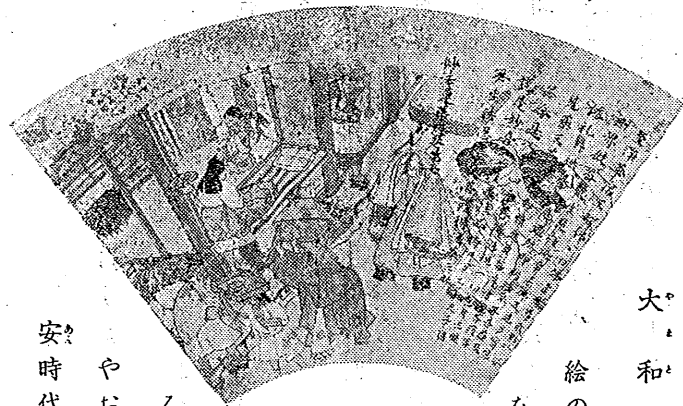
ほうおう堂という名まえは、屋根のかざりにほうおうがついてゐるからだといわれていますが、屋根の形や左右にのびたろうかのかっこうにも、ほうおうという鳥の美しいすがたがあらわれていることに気がつくことでしょう。



大和絵

絵の中ほどをどらんさい。大きなげたをはいた女の人、おどもをふたりつれています。この人たちの着物やかぶりものなども、いまのものとずいぶんちがっています。

向こうがわに店がみえます。皮ざいくの店らしく、なにかの毛皮がひろげてあります。くだものをならべたやお屋らしいのもあります。これは、平安時代の町の風景で、大和絵でやわらかに

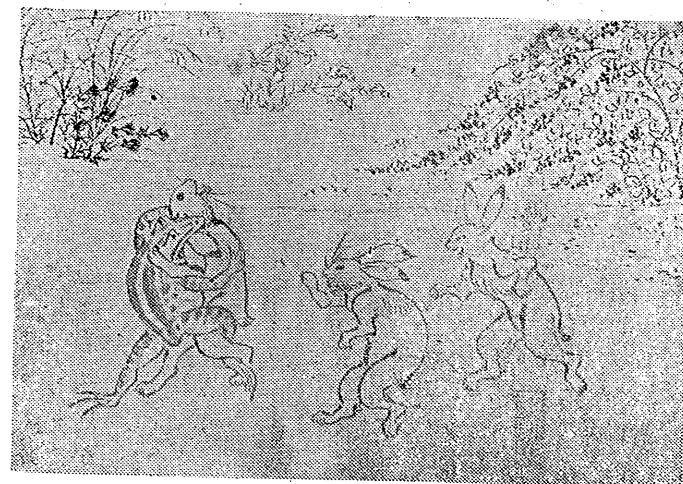


かきあらわされています

絵巻物

四つに組んだ大ずもう。かえるは、うさぎの耳をくわえて、得意の足かけをしました。うさぎはけんめいにこらえましたが、たおれそうです。あまりかねた二ひきのうさぎが、うしろから手をふり足をふって、おうえんをはじめました。

主ひょうは、はぎやすうさぎが



さきみだれた秋の野原。これは、鳥羽僧正という人がかいた動物絵巻の一場面であります。平安時代の終りから鎌倉時代にかけての藝術の中で、とくにすぐれたものの一つです。

さあ、うさぎが勝つてしょうか、かえるが勝つてしょうか。

仁王さま

こんどは仁王さま。大きな目のびた手さき、しっかりふまえた両足、どこをみても、力があふれています。





とも鎌倉時代の作で、ほりものとして代表的なものです。

能面

これは能につかうお面です。

舞う人のあるきかたや、身ぶりや、手ぶりによつて、このお面は生きもののようになり、いろいろな表情をあらわします。室

仁王さまは寺の門に立って、ほとけさまをおまもりします。右の仁王さまをほつたのは運慶だといわれています。ふたつ



町時代の藝術品です。

イソツブ物語

三年生のときに習ったイソツブ物語。イソツブ物語はイソツブという人が書いた

たお話ですが、これをキリスト教の宣教師が日本に傳えたのは、

三百五十年ほどまえのことです。

いんさつ機も外國から渡つてきていましたから、こんなりっぱな本ができました。日本のことばになおしてローマ字で書いてあります。

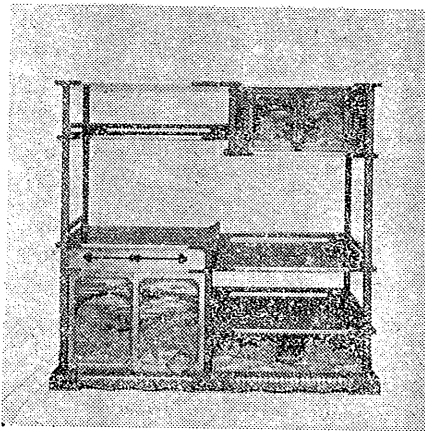


外國から書物が新しくはいつてくることは、外國人の心が傳わることで、日本はこのような心をとりいれて、どんどん育ってきました。

まき絵書だな

これは、茶たんすにしていますが、そうではありません。江戸時代にできたまき絵書だなです。

まき絵というのは、うるしをぬったうえに、金や銀のこなをまいて、もようをあらわしたものです。また、なまりや貝などをはめこんだものもあります。黒うるしの中に、銀や貝が光をはなっているのは、なんともいえない

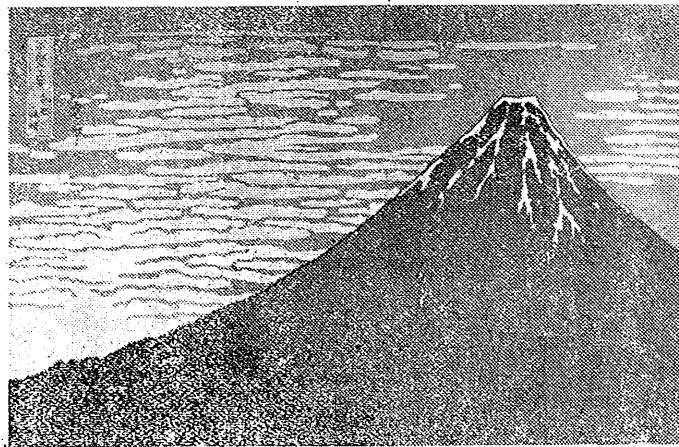


い美しさです。

まき絵は、日本のすぐれた工藝品の一つで、古くから外國人にもてはやされてきました。

浮世絵

おなじみの富士山の絵です。この絵は北斎という江戸時代の人のかいたもので、浮世絵といえます。この浮世絵は、版画で、絵をかく人と、それを木にほりつける人と、紙にすりあげる人との共同作



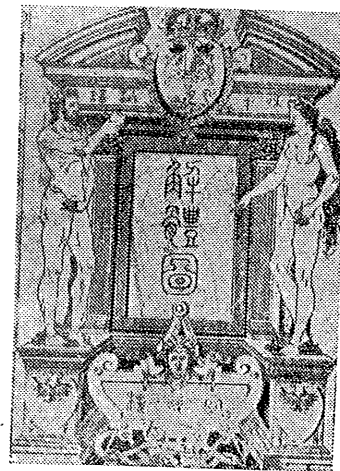
品なのです。三人がひとつに心をあわせた美しさは、このとおりりつぱなものとなって生まれたのです。

解体図

これは、オランダのターヘルアナトミアという人体のことを絵いりで説明した本を、いまから百八十年まえに、日本で出版したものです。

表紙の文字は、「かいたいず」

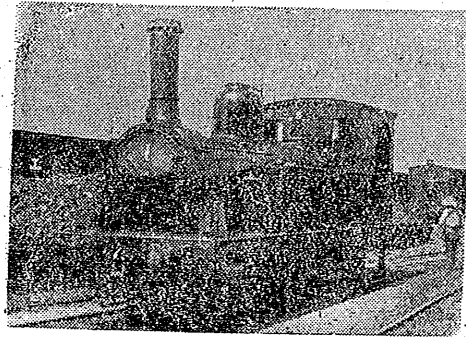
と読みます。そのころまで、人間のからだがどうなっているか、ほとんど知られていなかったのですが、この本によって、日本



の医学は、はじめてしっかりしたものとなりました。この本を日本語になおすのには、どれほど苦心したかわかりません。新しい学問をきり開いていくときは、いつの時代でもなるなるのどりでよくてなしとげられるものではありません。

汽車第一号

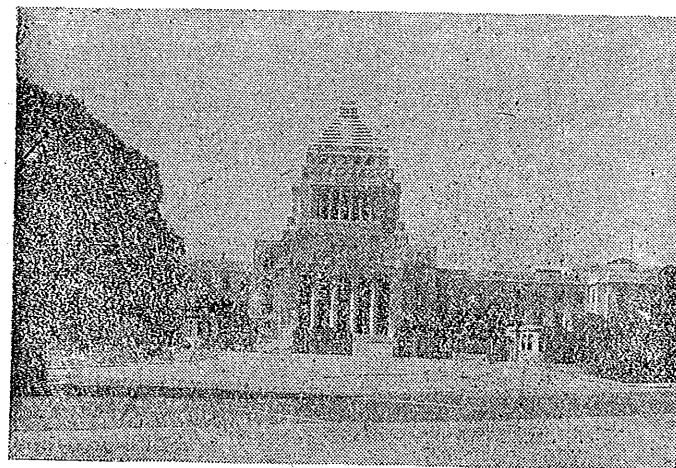
なんとかわいいう汽車ではありませんか。これは、汽車第一号で、明治五年九月十二日、はじめて日本で東京横浜間を走ったものであります。汽車にすぎらず、船でも、自動車でも、日に日に進歩しています。そうして、遠い



ころも近くなり、世界はだんだん小さくなるような気がします。

議事堂

みなさんがたの代表が、全国からここに集まって、いろいろなことを相談します。平和な国、日本を作るために、また、文化国家をきずくために。
こんどの新しい憲法は、この議事堂でたんじょうしました。



おしまいのことば

これで、日本の面影を写した写真帳が終わりました。このような歩みをたどってきた日本を、これからどうもりたてていけばいいでしょうか。

それは、民主主義ということばをほんとうに生かしていくよりほかに道はありません。ことばを生かすということばは、身に行うということです。

こうして、みんなの歩調がそろったときに、はじめて、日本が正しい、美しい国となることができましょう。

國語 第五学年 下
 Approved by Ministry of Education
 (Date Jan. 7, 1948)

著作權所有

著作發行者

文 部 省

昭和二十三年一月七日翻刻印刷
 昭和二十三年一月二十五日翻刻發行
 (昭和二十三年一月七日 文部省検査済)

翻刻發行
 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社

印刷所
 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社

發行所
 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社

1160.8-1-12

版 (111)	句 (71)	祖 (55)	悲 (47)	冷 (36)	荒 (23)	祝 (4)
解 (112)	選 (77)	順 (55)	傳 (47)	與 (37)	菜 (23)	賀 (+)
識 (114)	旗 (77)	共 (56)	歷 (47)	經 (40)	党 (25)	路 (10)
化 (114)	誠 (89)	池 (56)	史 (47)	驗 (40)	進 (25)	輕 (16)
憲 (114)	堂 (104)	承 (58)	便 (47)	績 (42)	詞 (34)	散 (15)
義 (115)	卷 (106)	里 (59)	消 (48)	童 (43)	区 (35)	容 (20)
宣 (109)	評 (62)	簡 (48)	影 (46)	別 (35)	易 (20)	
師 (109)	細 (65)	裏 (53)	詩 (47)	因 (35)	欲 (23)	

國語
第六学年
上

